２０２４年7月7日（聖霊降臨後第７主日、特定９、Ｂ年）
牧師メッセージ
「罠にご注意！」
（マルコによる福音書６：1-13）

司祭ヨセフ太田信三

主イエスは故郷に帰り、会堂で教えました。それを聞いた人びとは驚き、問いました。
「この人は、このようなことをどこから得たのだろう」
「この人の授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡は一体何か」
驚きと問いは、信仰の入り口とも言われます。驚きには自分のそれまでの考え方、価値観を破壊する力があります。そして生まれる「一体この人は何者だ？」「どういうことだ？」という問いから、主イエスが何者かを知る歩みがはじまります。主イエスの故郷の人々も、この問いを大切にし、忍耐強く問い続けたならば、主イエスが何者であるかを知ることができたはずです。

しかし、人びとはイエスにつまずいてしまいました。「つまづく」という言葉は「罠にかかる、落とし穴にはまる」ことを意味します。神様や主イエスが罠を仕掛けたのではありません。「この人は大工ではないか」「マリアの息子で…」という言葉にあらわれているように、彼ら自身が自分の知識、価値観にとらわれ、主イエスを見誤り、罠に陥ったのです。

誰かと出会うとき、性別や出自、学歴や社会的な肩書などの情報だけで相手を判断してしまっては、相手を正しく知ることはできません。それと同じように、自分の価値観に固執していては、主イエスを知ることはできません。既得の情報や価値観にとらわれて相手を素直に見ることができない、ということは誰しも経験があるのではないでしょうか。自分の内にもある、そのような「罠」に注意を払うことも、信仰の歩みにおいて大切なことではないでしょうか。

不信仰とは、既得の情報や価値観にとらわれて相手や物事を自由に見ることができない不自由さです。それとは逆に、信仰はそのようなものにとらわれず、目の前の相手や出来事に素直に自分を開くことができる自由さです。イエスが弟子たちを派遣するとき、必要以上のものを持たせなかったのは、そういった色々なものにとらわれてしまうのではなく、空手で出掛けていくことこそが大切だったからでしょう。そしてさらに、二人ずつ遣わしたのは、一人の価値観や情報に固執するようなことがないよう、できるだけ自由でいるために「他者」が共にいることが必要だったからでしょう。私たち自身のありよう、私たちの歩みにおいても、あらためてこれらのことを心に留めたいと思います。